

数多い世界遺産の中でも人気の高いのがカンボジアのアンコール遺跡群。しかし、その半面、周辺では増え続ける観光客のために環境汚染が確実に進んでいるという。10年以上にわたり現地調査を続けてきた、金沢大学環日本海域環境研究センターの塚脇真二教授(51)が写真・金沢大学提供に、その現状や展望を聞いた。【横田美晴】

◆06年、アンコール遺跡公園の環境汚染調査などを行う海外学術調査チーム(ERDACC)を設立。カンボジアの同遺跡整備機構(APSARA)とも協定を結び、合同で調査にあたってきた。92年ごろから、アンコール遺跡の南約10キロのトンレサップ湖で、水質などがどのように変化したかを調べています。世界最高の淡水生物多様性を誇るカンボジア最大の自然遺産ですが、いずれは開発が進み、湖の環境は大きく変わってしまう。20〜30年後にデータを比較するためには、現在の記録を学術的に正しく残す必要があります。03年には日本の若手研究者らと水・地質・動植物の分野で調

査を始めました。その後、ERDACCを設立して対象をアンコール遺跡公園全域に広げ、大気や水、森林の3分野で調べています。アンコールワットの大気汚染がタイの首都バンコク以上であることや外来の魚や植物の出現などが分かりました。

金沢大学環日本海域環境研究センター教授

塚脇真二さん(51)



つかわき・しんじ 59年、福岡県出身。東北大学院理学研究科博士課程修了。理学博士。94年から金沢大助教授、昨年より現職。専門は海洋地質学。92年からアンコール遺跡の国際調査に携わり、06年からはアンコール遺跡区域内における環境評価調査チーム(ERDACC)の研究代表者。

世界遺産保護 金大生も参加

の話まである。観光産業の無計画さは、カンボジアの環境を汚染したり破壊する最大の不安材料です。

◆塚脇教授が調査を指導したスタッフが多くの活動する同機構で、昨年からは金沢大学生がインターンシップ(職場体験)を始めている。

学生たちは、大気や水質の調査、湿原管理、遊歩道整備など、現地スタッフと同じ業務を体験します。学生たちには、華やかな世界遺産を地道に支える業務を見てくれたらと思っています。

カンボジアの環境調査

また、環境汚染が無計画な観光産業の発展と深く関係していることが分かってきました。◆長い内戦後、93年に国民総選挙で、ようやく安定したカンボジア。前年に世界遺産登録されたアンコール遺跡を訪れる観光客は、増えていった。

外国人観光客は、予想を上回る勢いで増えていきます。遺跡を抱えるシエムレアプ市は人口十数万人の町で、海外からの観光客は、98年には4万人程度。07年には100万人を超

え、シーズン中は肌が触れあうほど。京都でさえ、外国人観光客は8年で約94万人。小さな町に強い負担がかかっています。20年前には3軒だったホテルは今や100軒以上。水や食料、燃料が大量に消費され、ゴミも出る。汚染が進むのは当然です。05年から韓国、08年から中国でカンボジア観光がブームとなり、観光客が押し寄せています。トンレサップ湖畔にバンガローを建設する計画や、水上スキー

も参加してもらいたい。

目撃つば

光がブームとなり、観光客が押し寄せています。トンレサップ湖畔にバンガローを建設する計画や、水上スキーも参加してもらいたい。